

## 成田短歌会

代表 高仲一郎

成田短歌会は昭和31年の発足である。依頼70年近くの年月を嘗々と短歌に情熱を傾けて来られた先輩諸氏の足跡の先に今がある。毎年発行の『玉響』から久々湊先生(合歓)の作品評を一部引用して会の紹介といたします。会員募集中見学歓迎

夢見るは核無く基地無き平和の世有事の今こそ夢ふくらます

宮野 しげ

大戦終結後七十八年、戦争で亡くなるという国民を一人も出さずに来た日本であるが、長い一強政治によって憲法九条の「戦争放棄」の精神がなし崩しにされ、敵基地攻撃の能力を持つ兵器を作るようになった。今はまだ他国の戦であるが、いつそれが対岸の火事でなくなるか。作者の思いは切実である。

七色で足りぬ紅葉秋さなか風なき中に散る葉もありて

大和 活夫

木々の紅葉の色はさまざまで、七色どころか十二色、いや二十四色のクレパスでも足りないくらい。しかし、儂いもので無風でもはらりひらりと散ってゆく。華やかなものほど終わりの姿は寂しいものだ「風なき中に」にその思いが込められている。

良きことを尽くして云いて受話器おけばコーヒー半分カップに冷えて

浅田 恵美

コーヒーを飲んでいたところにかかってきた電話。愚痴でも聞かされたのだろうか。相手を傷つけぬよう褒めてやっと受話器をおいて気がつけばすっかりコーヒーが冷めていた、というのである。そこに心ならずも「良きこと」を言ってお茶を濁してしまったという後ろめたさと、やれやれ、という気分が感じられる。作者はきっと「いい人」なのだ。

八十路われ積丹岬あへぎ来れば藍より青き藍の海あり

大槻 裕子

乗り物を降りてしばらく歩かないと積丹の海をじかに見ることが出来ない。積丹ブルーと言われる引き込まれるような深藍の海。この歌を読んで私にも感激したあの日の記憶がありありと思い出された。「あ」の繰り返しが印象的。

戦争で覚えし地名の哀しさや麗しき街キーワ・オデーサ

金山 京子

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まるまでまったく縁がなかった都市の名前が毎日のように報道されて、旧知のごとく親しい地名となつたが、それはそれで哀しいことだ。戦禍に見舞われなければきっと麗しい街だったことだろうに。直接に戦争反対と声高に言わず、これは立派な反戦歌である。

無位無冠のわが人生に悔いのなく死の来るときわれの定年

神郡 一成

無位無冠であることはまったく負の要素ではなく立派な生き方であると私には思われる。誰にもおもねらずわが道を通したということなのだから。下句が一字足りないから「死の来るときが」または「死のいたるとき」とされたらいかがだろうか。